

篤彦の腕に、水中でしがみついたときの、やわらかくて弾力のある守の体の感触があった。自分で太ももの辺りを押さえてみると、もう骨にちかい手触りだ。やがて、水中でさえ立てなくなる日が来るのだろう。だがその時がきて、タケシや守がいる限り大丈夫だと思った。

篤彦は、同時に、溺れた自分を見下ろしていた連中のすつくと立った形のいい脚を思いだし、今まで感じたことのない強い羨望と劣等感がおこった。自分の貧弱な体を意識し始めると、裸のまま大勢の中に混じることが疎ましく思われた。そして、その日から三日間、喉が痛いと言をつき、及川に足を向けなかった。

お荒神さんのひろばまで来て耳をすますと、土手越しに泳ぎ場の喚声が聞こえる。篤彦は体を包みきる川の匂いと水の感触が恋しくなり、四日目には自然に足が川へ向いていた。

その日は昼過ぎに雨雲が出て、雷の音も聞こえていたので、時間のかかる及川へは行くのはやめて、砂洲の向こう側の水辺で一人遊ぶことに決めていた。

竹やぶの下の浅瀬を渡ると、いつものように及川には向かわず、そのまま真っ直ぐ砂と石まじりの砂洲の斜面を背の高い夏草の茎につかまっただのぼり始めた。晴れた日のようにゴム草履を通してくる熱射もないので、爪先だてて歩くこともなかった。

小高くなった砂洲の上に立つと伸びたヒメシバやセイタカアワダチソウの間から及川の泳ぎ場が一望できた。曇り空の下に数え切れない人影がうごめき、川面や石垣の際に水しぶきが上がっている。誰の声ともわからない喚声がとぎれとぎれに聞こえる。動いているのに静かで遠い光景は、無声映画のようで、どこかもの悲しかった。

砂洲の反対側はゆるい斜面で歩きやすい。岸边にたどり着くと、以前、水際に掘っていた両腕を丸めたくらいの池が澄みきり、レンズのような水盤になっている。砂や小石を透かしている水底にちいさい河沙魚が住みついている。手ですくおうとすると指の間を通りぬけ、池に続いている流れに逃げていった。よく見ると、底の中央あたりから湧き出している清水が、細かい砂を小さく舞い上がらせている。篤彦は水盤に顔をつけ、とがらせた唇で噴き出す水を吸い込むように飲んでみた。冷たくはないが、甘みがあつてうまい。

底を軽く掻きまわすと、一瞬、水は濁るが、湧き水によってまたたく間に澄みきってくる。舞い上がっている砂は漂いながら、その中に含まれている細かい石英や黄銅鉱を金箔のように輝かせている。篤彦は目を開けたまま顔をつけ、息のつづくかぎりその清冽な水の感触を楽しんだ。

それに飽きると立ち上がり、及川の方を見やった。さっきと変わらず、水しぶきが上がっている。つい数日前まで、あの賑わいの中に自分がいたことが嘘のようだった。篤彦は水中で握った鉄の棒の感触を思い出そうと、手の平を何度も開いたり閉じたりした。

その時、雲の間からポツリと落ちてきた雨粒が白い小石を濡らし、またたく間に大群の雨となって川一面をおおいつくし始めた。「どうしよう」気持ちが悪くなると、いつもよりもっと歩けなかった。

濡れた砂洲を上っていると、水浴びをしていた連中が裸のまま手に衣服を抱え、いっせいに土手への急な斜面を列をなして上ってゆくのが見えた。列は三列だ。城壁を駆けあがる忍者のようだ。堤防にたどり着いた小さな忍者たちは、そのまま

河内橋と祇園橋の二手にクモの子を散らすように走り去っていく。

「あの中に守たちもいるのだろうか？」

斜めに降り注いでいる雨は、雷鳴まじりになり、風にあおられ川面に幾条もの縞模様をつけながら揺れ動いた。

まだ三時ごろのはずなのに、たれこめてきた雷雲のせいで夕方のように暗い。濡れた草がまとわりついて、何度も足を取られそうになる。びっしょり濡れて肌へべりつくシャツが、気持ちさをさらに悲しくさせる。

雨に霞んだ及川に目を戻したとき、童夫はんの舟のまわりを動きまわっている三、四人の人影が目に入った。この川原にまだ人がいるのだ。そう思うと篤彦は心強かった。

どうにか砂洲を横断し、転げ落ちそうになりながら斜面を下って浅瀬を中程まで渡った。そのとき、左足のふくらはぎが引きつり、バランスを崩した拍子に足を滑らせ、水の中に尻もちをついた。足から外れたゴム草履が流されていく。祖父が買ってくれた気に入りのやつだ。つかまえてはと思っただが、流れは速く、すぐに小さくなり見えなくなった。

そのとき、祖父のことが頭に浮かんだ。

「縁側の戸は開いたままだ。早く帰らないと、家の中に雨が入ってしまう」

西の空を雷が移動していた。

灰色に霞んだ讃岐山脈が、長い怪物の背中のように見えてくる。暗い空からその尾根に、鋤の形をした稲光が幾度となく走った。そのたび雷鳴は空をつんざき、

余力を誇るように低く唸っては川原中にとどろいた。稲妻のひと刺しひと刺しが、

篤彦には自分だけに向けられている奇襲に思えた。

土手はすぐ目の前だ。川の中にへたばったまま、痙攣している左足をゆっくりと屈伸させてみた。何回もくり返すと痛みが和らいでくる。篤彦は、足首に置いた両手に向こう臍から膝に少しずつせり上げながら、上半身を起こそうとしたが、太もものところで手の平が滑り、再び水中に突っ伏してしまった。

身体の奥のあの邪悪な虫が、今また頭をもたげ、行く手に立ちはだかっている。川は浅かったが、半ズボンの間から侵入してきた水に下半身は冷えきり、少し頭痛がする。雨粒に体を打たれながら、自分の中で暴れている見えない敵に困惑しきっていた。まだ止みそうにない雨の中で、ふと篤彦の頭を及川で水浴びをつづけている人影がよぎった。

「あの連中、走れるのに、何故、わざわざ、雨の中でいるのだろう……」
考えると、答えは簡単だった。どうせ濡れているのだ。だから、夕立だからと言って、川の水も雨も同じなのだから、慌てて逃げ出さなくてもいいのだ。そう思うことで気が楽になった。すると、身体の奥で勝ち誇ったように居座っていた意地悪な虫も、急に小さくなり消えていった。

篤彦は、上半身にまとわりついていたシャツを脱いだ。皮膚に直接あたる雨は、もう冷たくなかった。臆病になりすぎていた自分が、滑稽にさえ思えてきた。そのとき、無性に空腹をおぼえ何か暖かいものが欲しくなった。出がけ、雨が降りそうだったので、少しでも早く川へ行きたいと思い、母が用意していた昼食を食わずに來ていたのだ。

浅瀬の向こう岸の番小屋が目に入った。竜夫はんが、そこで川蟹を焼いてくれた

ときのことか思いだされた。前の浅瀬に、竹を並べて作ったヤナで捕ったやつだ。

あの日も夕立ちだった。

学校帰り、濡れながら土手を急いでいた篤彦を、いつもは口数の少ない竜夫はんが、「ここで雨宿りせーや」と大きな声で呼んだ。

心細さから救われた気がして小屋の中に入った。床に仮眠用の筵が敷かれ、獲物用の竹籠がいくつも転がっている。板壁に立てかけてあるイサリが、生き物のように光っていた。

小屋の入口に角のかけた七輪があった。竜夫はんは、火の気の残る底に乾いた小枝を入れ、火がおこると籠の底から手でつかみ出した蟹をそのまま投げ込んだ。蟹は泡を吹き、黒く濡れた毛に覆われたハサミや足をはげしく動かしていたが、すぐに赤い色に変わり、辺りにこうばしい匂いが漂った。二つに割った一方を、竜夫はんは黙って差し出した。湯気をたてているホクホクとした白い身を頬ばると口の中いっばいに焼蟹の味がひろがり、それは顎が落ちるくらい美味かった。

雨に打たれ、空腹と不安の中で冷たくなっている篤彦の体に、あのとときの味と匂いがよみがえり喉が鳴りつづけた。

水面を叩く雨音が少し弱まって、瀬音がだんだん高く聞こえてきた。

増水した流れが押しよせて来ないだろうか？ 雨に体が溶かされてしまうこと

はないが、大水に流されたらどうしようもない。強い不安がよぎった。

「落ちて立っつんだ」心に言い聞かせながら、もう一度、自分の体によじ登るような格好で起きあがろうとした。手にゆっくり力を入れ、突っぱりながら上半身を起こしていくと、今度はすべらずにうまくいった。何とか番小屋のところまでた

どり着いたところでふり返った。浅瀬は水かさが増したようだ。もう流される心配はない。

土手を上れば、後は歩きなれた畦道だ。坂に差しかかったとき、篤彦は聞き慣れた声が自分を呼ぶのに気づいた。土手を見上げると、草の間に好恵の姿が見える。坂を急ぎ足で駆け下りてくると、濡れた頭と体を手ぬぐいでゴシゴシと拭き、持ってきたカップで裸の上半身をくるんだ。しばったタオルを篤彦の頭にターバンのように巻き付けた。

「インド人みたいやな、もう大丈夫やきん」

好恵のやさしい声と手のぬくもりが篤彦を安心させた。

「大降りになったんで、ちょっと家に戻ったら、畳の上は水で濡れとるし、お爺ちゃんはおアツが川に行ったままやから、すぐ迎えに行け言うし。けど、エライ目におうたなあ」

好恵がそこまで話したとき、篤彦は大雨の中で川に入っているヤツがいるのを見たら、気持ちが楽になってきたという話をした。好恵はからかい半分で明るく言った。

(以上9月19日放送分)